



廃炉の道のり
まだまだ遠い

問われる東京電力の

安全衛生管理と情報発信

情報の正確性に欠ける東京電力の対応に対し福島県は、原因の究明と正確な情報発信に責任をもって取り組むよう申し入れた。―中略―東京電力は当初、飛散した廃液は「100ミリリットル程度」と発表していましたが、その後の作業員などへの聞き取りを行った結果、その数十倍の「数リットルだった」と30日に発表した。さらに当初「1次下請け」の5人で作業していた」と発表していましたが、これについても「3次下請け」だった」と訂正した。（10月31日テレビU福島）

今あらゆる企業の現場において、「元請企業」は多くの「下請け企業」を抱えている。そして元請企業からの発注を受けた下請け企業（1次下請け）は、さらに2次・3次いう下請け中小零細企業を抱える。何のことはない。発注された金額を低額で請けおわせる二次・三次へといくほどに当初の発注金額は下回っていく。またそこで働く労働者の賃金も下回っていく。

建設の現場には、出入りをする社名の異なる大型トラックやユニック車が多く出入りする。その多くの車に、装備不良をはじめとして中古車が目立つ。元請けである建設企業の安全衛生管理者はその車の装備点検に目を光らせる。なぜなら、現場における一切の責を負うからである。

12年前の3月11日、東京電力福島第一原発で事故が発生をした。その収束のために過酷な作業の従事に沢山の作業員が送り込まれた。その数は毎月1000人から3000人に達し、それは東京電力の社員、自衛隊員、消防隊員、そして東京電力の協力会社の作業員であった。

その後においても、「800程度の企業が廃炉作業などに従事している。また現場の下請け作業員は慢性的に不足している」と言われてきた。

（2013年10月25日。福島ロイター編集）
さらに2019年の全国労働安全衛生センターの資料によれば、廃炉作業に従事する労働者の数は「東電・1678名、協力会社・14157名」と報告をされている。

前記の通り、当然にして現場作業における一切の管理責任は「元請」の東電にある。その管理責任とは当日の作業員一人一人の健康状態の点検はもちろんのこと、安全作業手順、保護具の点検であり、具体的には次の項目があげられる。

◆設備、作業場所または作業方法に危険がある場合における応急措置または適当な防止の措置。

◆安全装置、保護具その他危険防止のための設備・器具の点検。

◆作業の安全についての教育及び訓練。

◆発生した災害原因の調査及び対策の検討。

◆消防及び避難の支持。

今般の被ばく事故にあつては、作業員の雇用先の企業がどこであれ、元請である東電の管理責任が問われなければならない。しかもその訂正を事故発生後5日経ってから行っている。

原子力規制委員会の山中委員長は1日の記者会見で「事故収束作業の手順を定めた実施計画に違反しており、東電の安全管理が不十分だった」との認識を示した。

しかも土屋復興相は30日の衆院予算委員会で、東京電力福島第一原子力発電所で作業員が放射性物質を含む廃液を浴びた事故について「報道で知った」と述べている、それで良いのか。さらに岸田首相「関係省庁の連携や、意思疎通は重要だ。いま一度点検させたい」と強調した。

（日経新聞10月30日）

そして11月2日三回目の処理水の放水が強行された。しかもその放水の管理は30年から40年が必要と言われている。国際原子力機関（IAEA）は最後の一滴までその管理に責任を持つと言っているが、管理の「本家」である東電の体質を考えると、長期間の責任を担わせることができるかと疑う。

さらに「廃炉までの数十年にわたり国が全責任をもつ」とした政府の約束にも疑問を持たざるを得ない。



【「ゴミ」について】

「気づいたこと・感じたこと」



人間はカラスより劣っているのか！

「カラスは社会的知能が高いことも知られている。社会的知能とは、集団の中で他の個体との関係を上手に捌く能力、いわば政治的なアタマ」を持っていると言われている。

カラス類は群れを作る。群れの中には順位があり、社会的な関係性というものが存在する。そのことはまず誰が誰であるかをちゃんと記憶し、その順位を覚えておかななくてはいけない。うっかり自分より強い個体に先んじて、餌を食べてしまったりすると攻撃を受ける恐れがある。また「ゴミ」を見つけて集まったカラスが「カア」「カア」と点呼を取るように一声ずつ鳴いていることがあるが、それは点呼になりエサをとる順序となるという。

また、カラスがクルミを道路に置いて車に轆かせて割るといふことはいろいろな場面で用いられる話である。とりわけ運転免許の教習場のコースのカーブにカラスはクルミを落とす。教習生が慎重に徐行運転をするカーブは、格好の場所となる。つまりカラスの知恵の回る一場面であらう。

「経済」を三唱する異例の演説は「岸田首相は、何をやりたいのかわからない」という批判の広がりに対する首相の反論だったという。そして「来年度中には名目賃金の伸びが消費者物価の伸びに追いつく」と。しかし賃上げによる人件費の捻出のために、企業は製品の価格を上げざるをえ

なくなり、さらに傘下にある下請け中小零細企業に発注金額の減額を求めてくる。

中小企業にも賃上げが広がるかどうかは日本全体の賃金水準の向上や国内の消費拡大にとっても重要であるにもかかわらず、中小企業にも賃上げが広がるかどうかは消費拡大にとっても重要である。東京商工リサーチの調査でも中小企業の80%が賃上げを行うもののベースアップの実施予定はそのおよそ半数である。さらに労働者全体の4割近くを占めるパートやアルバイトなど非正規雇用で働く人たちの賃上げがある。そこには賃上げの手は伸びていない。

さらに付け加えれば年金生活者であり、中でも深刻なものに一人暮らしの高齢女性の年金生活者の生活がある。果たして物価高に追いつけていけるだろうか。これらに対し、三唱する岸田首相の「経済政策」に説明はない。

今、家庭ごみの搬出日が決まっている。しかし「燃えるゴミ」の日に「ガラ(燃えないゴミ)を出したりする」。また生ごみの出し方は、「生ごみ」は別袋にして口をしつかりとしばり一般ごみの袋に同梱をして出せばカラスの「餌あさり」を防ぐことができる。しかし、多くは生ごみをそのまま一般ごみと一緒に出していく。

少なくとも人間はカラスより知恵があるはずである。とするならその知恵を使って「政治の良し悪し」を判断できないのだろうか。そんなことを感じる今日この頃である。



今が旬・柿食べれば医者いらず

和歌山県農業挙動組合などは、県産柿の主力である「和歌山の種無し柿」に含まれる柿タンニンに悪玉(LDL)コレステロール値の低減作用があることを臨床実験で実証したと発表した。

機能性表示食品として消費者庁への届け出を8月に終了したと報じている。

(毎日新聞・9月16日)

1年を通して食べられるバナナの効果

近くのスーパーに買い物、「足」がない連れ合いに代わり私の「三輪電動自転車」の出番となる。私が免許を返納して7年になる我が家では、近くのスーパーへの買い物はもっぱら私の役割。この頃の物価の値上がりを買いたい物に行くたびに実感をする。また値段は据え置かれているが中身は半分以上、これでは値上がりと同じである。

さて手渡されるメモに「果物」とある。季節よつてはいろいろだが、値段を見て伸ばす手が引つ込む。そしてバナナに手が行く。栄養豊富で1年を通して手軽に食べられる、しかも極端な値上がりはない。そのバナナの驚くべき効果について参考になればと思いい報告をしたい。

「バナナには、消化されやすく短時間でエネルギーに変わるブドウ糖や果糖、消化にやや時間がかかるショ糖など、体内でエネルギーに変わる速さが違う糖が含まれています。そのため、スタミナを持続させるのに効果的で、運動をするときの糖質補給にも適している。

【参考】オールガイド食品成分表より

今までにこれほどに

やせ細った熊を見たことがない

山のブナについては全果的に実りが悪く、ミズナラ、コナラについては、中通りでは並作となりましたが、会津地方では凶作となった。全体的には堅果類(ブナ、ミズナラ、コナラ)の結実状況は昨年度に比べて悪くなっているため、冬眠する時期(12月ごろ)までクマがエサを求めて人間の縄張りに入ってくる熊も死にもぐりであろう。そして全国的にクマによる人身被害が多発する中、駆除をする件数が増えている。とりわけ子熊を連れてた母熊を見て「殺さずに保護すべきだ」などと訴える声もある。しかしヒトの居住域の縮小と住民の減少はこれからも続き、熊などの野生獣の生息域の拡大は続く。熊の危害を受けた地域では、「被害」も含め熊と人との軋轢が深刻な社会問題になっていることを忘れてはいけない。

山に入った猟師が語っている。「今までにこれほどにやせ細った熊を見たことがない」と。熊も死にものぐいであろう。そして宮沢賢治の「なめとこ山の熊」のあらずしを思い出す。

なめとこ山の麓に小十郎という熊撃ちの名人がいた。小十郎には家族を養えるほどの畑はなく、山林も伐採が禁じられ、里では職にありつけず熊を撃つしか道がなかった。小十郎は一家七人を養うために熊を撃ちまくったが、本当は熊に申し訳ない気持ちでいつぱいであった。殺した熊には、次に生まれる時には熊になるなよと語りかける。そして、熊の肝と皮を担いで帰る時はみるかげもなくぐんなりする。

ある日小十郎は、木に登っている熊に出会い鉄砲を構えた。鉄砲をつきつけられた熊は観念し、木から下りると小十郎に自分が殺されなければならぬ理由を尋ねた。小十郎は、最後には安く買い叩かれてしまう熊の末路を教え気の毒に思っていることを告げた。さらに本当は熊撃ちをやめて、草の実でも食べて死ぬならそれでも良いと本音を漏らした。すると熊は、二年間し残した仕事を済ませて、二年目には小十郎の家の前で死んでいてやるから胆でも皮でもあげると約束した。小十郎はそれを聞くと切なくなつて見逃してやった。そして二年後、熊は小十郎の家の前で約束どおり死んでしまった。小十郎は熊を見て思わず拝むようにした。

小十郎は90歳になる母に弱音をほき孫達に見送られ出かけて行った。それから白沢から峰を越えたところで猟を始めたが、不意打ちで熊が現れ小十郎は撃ち損じて熊に襲われ「死を悟り熊どもよ、ゆるせと心でつぶやいた」。三日後、小十郎のために数多くの熊が集い、盛大に弔いが行われている場面で物語が終る。



カンパありがとうございました。

七名の方から計1万3000円。二名の方から切手、ハガキを頂きました。
(事務局)

報告・提言のひろば



今般、東京大学名誉教授・高橋哲哉先生からの報告がありました。記名にて掲載いたしました。

(事務局)

月に一度の通院に御苦労されているとのこと。そうですね。バスやタクシーの運転手不足は何とかしてもらわないと、われわれ高齢者は大変です。さいたま市でも事情は似たり寄ったりです。

私は3月にコロナ、7月に带状疱疹に罹患したところに、この夏の異常な猛暑。体力に大きな不安を抱えた夏でしたが、8月の北海道、9月の福島(南相馬)、それに10月の秋田も含めて、講演を中心にハードな日程を何とか乗り切ることができました。南相馬では、友人の牧師が中心になって準備した企画で小高区の人びとと出会い、被災地の「いま」を教えられました。

ウクライナ戦争、「台湾有事」論に加えて、イスラエル・ハマス戦争まで、今こそ「戦争反対勢力」が立ち上がらないといけないのですが、日本の現状を見ると情けない限りです。

■喜多方山都地区生活支援支え合い会議(事務局は社協)は2019年(令和元年)12月に設立されました。「高齢者の集いの場」や「高齢者の(買い物や通院)足の確保」などが「課題」として取り上げられました。1年目は予約型乗合交通(アランド交通)の勉強会。2年目は山都地区か

ら喜多方地区へのデマンド交通の路線要望。3年目は「集いの場」としての「高齢者いきいきサロン」実施地区の視察と「認知症啓発プロジェクト」(オレンジプロジェクト)の一環として、町内の高齢者介護施設等にオレンジのマリーゴールド苗の配布。4年目は、オレンジプロジェクトの継続発展(施設入所者等といっしょに植栽)と「集いの場」づくりで「ミニサロン」開催に向けた集落との話し合いや支援、更に「高齢者の買い物支援」として、町内の1地区での試みとして、簡易郵便局(希望者申込用紙設置)や介護老人保健施設(地域貢献活動の一環としての車両運行)の協力のもとに実施予定です。支え合い会議でもよく出される話題は、「歩いて集える範囲」の場の必要性や、「出てこられない高齢者」とどのように関わって行けるのかです。「公助」から「共助」さらに「自助」への流れかとは思いますが、本来は「公助」の強化こそ求められているのではないのでしょうか。また高齢者(一人暮らしなど)の実態には、労働問題(農業・中小ものづくり企業・商店街など地域産業の衰退と働く場の減少)が根本にあるのではないのでしょうか。

(喜多方・S・Y)

■「老いの単身赴任」という言葉は、まさに今の私の立場です。身内の者は遠くに住んでいることもあり月に一度ぐらいの間隔で私の様子を見に来る状況です。OB・Gの会が取り組む問題はまさに私にとっても重要なことです。ともに取り組んでいきたいと思えます。

■県会議員選挙は残念ですがわが党からの候補者はなく、折角の権利を行使すべく、候補者のこ

れまでの実績、公約などを十分に判断したいと思えます。私は両親を介護保険ができる以前に見送りましたが、この年齢で実姉と甥子の介護をするために介護保険制度を学習しながらケアマネジャーと相談をしています。しかし認定までに時間がかかりすぎます。検討をする必要があると思えます。

■ニュース送っていたいただきありがとうございます。ニュースを見ていつも勇気づけられ、元気づけられています。私も11月号から、OB・Gニュースを復刊させたいと思います。

■今年も残りが2か月余早いですね。暑い、暑いと大騒ぎしていたのがウソの様な気がします。今冬はエルニーニョの影響で暖冬が予想されますが自然は分かりません。今月15日に地域の秋祭りさいたま市でも事情は似たり寄ったりです。私は3年ぶりに「山車」を繰り出し町内を回り、子供達が威勢よく掛け声をあげて楽しそうそうでした。残念だったのは前日迄晴天だったのが当日だけ土砂降りの雨で気の毒でした。小生達も町内で「芋煮」「綿あめ」等で子供たちを接待し、雨天を吹き飛ばし楽しみ夕方から役員達でこれも久しぶりに打ち上げ反省会を行い交流しました。コロナの影響を忘れさせて貰いました。

■国会も、岸田首相の迫力無い減税、経済対策の演説をしていましたが、国民にはそれほどアピールをしなかつた気がします。減税するならば、「財源」は何処からですかね。もう少し国民目線の政策そして本気度を期待したいです。

■神奈川県連合は本日、横浜で「活動交流集会」

を開催しました。今年は横須賀(原子力でない)米軍空母の母港となつてから50年、原子力空母(現在は空母ロナルド・レーガンの母港になっています)の母港となつてから15年という節目の年ということで、横須賀で永年、米軍空母母港化反対の先頭に立つてたかたつてこられた呉東正彦弁護士に講演していただき、その後、党員の主導で「LGBT理解増進法の問題点」、「エンパワーメント講座」(ジェンダー平等社会の実現に向けての共通理解のために)という勉強会、最後に秋の党勢拡大運動の説明、現状と課題についての発表があり、活発な議論が行われました。各地域での日常的な活動も重要ですが、このように、黨員が何か所に集つて学習し、議論する場を作っていくことが、社民党の活性化のためにも重要なことだと考えています。

■まだ蚊と格闘をしています。「地球沸騰」の代表格です。今朝は隣の医者で胃腸の検診を行い「異常なし」でほっとしています。身の回りのことで手一杯ですが頑張ります。

■コロナが5月8日に5類に移行され、緊急事態宣言の終了が宣言されましたが、未だマスク着用が解けない現状にあります。毎回ニュースの自宅配布を頂く先輩に元気をもらっています。

■郡山市議選の総括ですが、今後どこまで深まるか、どうかがあると思えます。それは組織性、運動の在り方などもっと討論を深める必要があると考えました。

